

The background features a complex, abstract pattern of black lines of varying thicknesses, creating a sense of movement and depth. The lines are most dense on the left side and become more sparse towards the right, where the text is located. The overall aesthetic is modern and artistic.

ICSAF 2018

インターカレッジ・ソニックアーツ・フェスティバル

2019. 3. 9 sat

3.10 sun

JSEM 特別コンサート

3. 9 sat

ピアノの練習

ピアノは端正な楽器だ。音の高低が例外なく一直線に並んで、その全ての音が均一なエンベロープを持っている。もちろん、音程による差異はあるが、音を鳴らすメカニズムはほとんど全て等しい。その均一に抽象化した楽音を奏でる楽器は、そのメカニズムと対峙するように人間の身体を開拓してきた。ほとんどの楽器は、人間が意識的に行う動作に対して従順に答えてくれる。例えば、管楽器や弦楽器が持つエンベロープの自由度は、アーティキュレーションにおける幅広い表現をもたらすだろう。しかしピアノは、ピアノというメカニズムに対する身体を要求している。音楽を表現することと身体が最も離れているのは、ピアノをはじめとする指で弾く鍵盤楽器なのではないだろうか。

一直線に並ぶ鍵盤は、一直線に並ぶ数列と相性が良い。等間隔の数列はあるスケールを生み、そのスケールを人間の5本の指に割り当てることができる。そして、そのスケールの、5本の指に割り当てられた音以外を、ピアノ演奏特有の「指を変える」動作によって展開させてゆくのが、この作品の作曲アルゴリズムである。この作曲アルゴリズムさえ解ってしまえば、楽譜などいらないうらなうだろう。しかし、これは特に目新しいことではない。なぜなら、ピアノそのものが音楽の理論体系を形として示してくれているように、私は感じるからだ。



鈴木 悦久 (Yoshihisa SUZUKI)

1975年生まれ。昭和音楽大学で打楽器を、情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) で作曲を学ぶ。ISEA2004、Sounding Taipei2004、大垣ビエンナーレ、ノイケルン48時間にて作品を発表する。アルスエレクトロニカ2006デジタルミュージック部門ホノラリーメンション賞受賞 (オーストリア、Mimiz名義)。コンピュータと自動演奏ピアノを用いたゲームピース「自動演奏ピアノのための組曲」では、第3回 AAC サウンドパフォーマンス道場にて優秀賞を受賞した。名古屋学芸大学講師。JSSA 運営委員。

ナイチンゲール

ナイチンゲールは小夜啼鳥 (サヨナキドリ) とも言う……。私はある夜に、バタイコの「スズメバチの様に美しい」と言う言葉に出会った。そしてすぐに、あの例の写真からワイルドの『サロメ』を思い出した。そしてスズメバチの「刺す」と言う行為から、谷崎潤一郎の『春琴抄』をやがて思い出した。男が盲目の女の為に自らの眼球を刺す行為。それらの連想はやがて溶け合ってひとつの結晶となった。電子音響音楽映画となって。私は絵を描き、万博公園にある茶室、千里庵まで写真を撮りに行き、それらを動かしてみた。私は閃光を欲したので、シャリツやコンラッドが用いたフリッカーの技法を取り入れ個人的に楽しんだ。その分、日本庭園はスノウの様にある視点から動かさないことにした。音楽は、古い10代の時に録りためていた音楽素材を主に用いた。タスコの4チャンネル・テレコの再生ボタンを押してみると、なんだか懐かしい音が聴こえてきた。



林 恭平 (Kyohei HAYASHI)

1984年福井県で生まれる。2012年、大阪芸術大学大学院作曲コース修了。七ツ矢博資、上原和夫、宇都宮泰、檜垣智也に師事する。少年時代より電子音楽の創作を行い、芥川龍之介の提唱する「話らしい話のない小説」を電子音、具象音によって表現した文学性に富む電子音響音楽作品は、国内外で多数、入賞、入選を果たし高い評価を得ている。

リポクローム

リポクロームは自然の動植物に含まれる脂質を含む天然色素の名称で、緑黄色野菜や魚介類に含まれる黄色や橙色の色素を指す。ビタミンA、リコピン、ルテインなどの栄養となり、身体にはとてもよいそうです。黄色くて健康にいい、というイメージをもってこの作品を作曲した。食物と植物は、静かだけれどジェネラティブな生命エネルギーに満ちたものとして、最近の拙作でしばしばテーマになっている。その生命エネルギーに耳を傾けると、速度、遠近、広狭、形、運動に関して、現実世界から離れた抽象的な「かたち」が聴覚を通じて身体へと入ってくる。作曲中は、肉体的な変化と超現実 (または脱現実) 空間での変化が表裏一体に接しているところに身を浸した。

この作品の最初のバージョンは、2016年9月に愛知県で初演された。同年12月 JSEM 第20回記念演奏会での改定再演を経て、2018年8月には韓国大邱で開催された国際コンピュータ音楽会議で演奏された。今回演奏して下さる大井浩明さんは、この作品にとって四人目のピアニストとなる。再演を重ねるたびに、演奏家それぞれの強い表現力に圧倒されるが、そうした生演奏の細かなニュアンスに柔軟に対処できるよう、今回はシステムをさらに改定した。エレクトロニクス・パートとして発せられるのは、素材的には全てピアノの音であるが、リアルタイム変調、プリレコード音のSF、シーケンズ化された上で制御される合成プログラム等、様々なレベルのインタラクションで進行していく。制作は、名古屋市立大学音響デザイン室で行われた。

JSEM 特別コンサートは、
日本電子音楽協会
(Japanese Society for Electronic Music)
の会員による、特別演奏会です。



水野 みか子 (Mikako MIZUNO)

作曲家・音楽学者。作品は ISCM、ICMC、IMEB、Instant Donee、GEDOC、Musicacoustica、WOCMAT、WeiWuYing National Performing Arts Center 等、国内外の音楽祭や劇場で紹介されている。近作に、クラリネット・トリオのための《かげきじやないかげき》(2015)、ヴァイオリンとコンピュータのための《行き交う光束》(2016)、フルート・電子音・ムービーのための《Aksaray2, version of one-place performance》(2018) 等がある。2013年、カナダ、ニュージーランド、中国と名古屋を「高速度音響通信ネットワーク」で結び、「遠隔地音楽アンサンブル作品」を実現。名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授。

ちりりん-マルチチャンネルオーディオのための(2019初演)

「チリンと鳴った」という一文をウェブを使って検索すると、そのままの言葉で約15000件がヒットする。その殆どが、いくつもの物語の中の一文であり、魔除けや浄化など秘められた力の象徴として使われている。日常的には風に揺らぐ風鈴などを思い起こすが、その音で涼を感じたり安らぎを誘う効果は日本人特有の感覚ともいわれ、元々は古代インドの風鐸(ふうたく)と呼ばれる鐘型の鈴を魔除けとして用いたという背景があるのだ。

中国の北魏(386-534年)の時代には、インドで塔廟にかけられた多数の風鐸が、風にゆられて音を響かせていたことが巡礼した僧たちの記録に残されている。日本には仏教と共に伝わり、法隆寺の五重塔をはじめ仏教寺院の屋根の四隅にかけられた。

現代でも邪気を祓う習慣は、風鈴の他にも鈴を身につけるなどの方法で残されているが、最も重要とされるのは音色であり、音色を絶やさぬようにすることなのだという。

この作品は、金属を鳴らしたときのジェスチャー、一つを使い、1/fのゆらぎはそのままに100個鳴らし続ける物語である。



仲井 朋子 (Tomoko NAKAI)

テクノロジーを軸とした音/音楽作品を発表している。近作はジャンルを横断した作品も多く、青森EARTH2014(青森県立美術館)でのインスタレーション、マテリアライジング展III(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)での展示作品などがある。国立音楽大学大学院音楽研究科修了。現在、東京藝術大学芸術情報センター、洗足学園音楽大学、玉川大学、各非常勤講師。<tomokonakai.com>

Sandcomber for EWI wind-synthesizer and computer

Sandcomberはジャズサクソ奏者尾崎朝子氏からの依頼を受けて行った研究の成果を元に作曲された。

トーキングモジュレーションは、現代ではそれをフィルタによって行うヴォコーダに取って代わられているが、マイクを通した声の入力音のみならず演奏者の身体的動作が出力音に直結していることからライブパフォーマンスとして有効性が高い。

AKAIのウィンドシンセサイザEWIは、音量と音高を決定する管楽器としての最低限のセンサの他に、元となった管楽器では存在し得ないアサインになっているモジュレーション量を取るためのリップセンサと、やはり元となったサクソやリコーダには存在しない右手親指のピッチバンドセンサを持つ。また、リップセンサの値は単独では出力はされず、一回のリップセンサへのパルス刺激で1周期変化するピッチバンドやプレス量として出力される。

これらのセンサと特徴的な出力を用いて、実際に音楽表現として用いることができる、動作に直結したヴォコーダすなわちトーキングモジュレーションをEWIのために設計・実装を行い、その成果をもとにSandcomberを作曲・制作した。

タイトルのSandcomberは「砂浜に埋もれている貴重な漂着物を探す人」の意味を持つ。本作品のパフォーマンスにおいて、リップセンサに紐づけられたEWIのモジュレーションによりコントロールされるヴォコーダ的な人の声が、ノイズという砂浜から新たな音色を探す作業をなぞらえたものである。



安藤 大地 (Daichi ANDO)

国立音楽大学音楽声楽科を経て音楽デザイン学科卒業。Sweden, Chalmers University of Technology よりMSc. 授与。東京大学大学院新領域創成科学研究科基盤情報学専攻博士課程修了(科学)。現在首都大学東京インダストリアルアート学科助教。音楽家と共同で創作する人工知能に興味を持ち、実践的に作品創作に応用できる人工知能研究を行なっている。

vl.mod.live (新作初演)

スピーカーという装置が登場してからは、それまでになかった音響を体験できるようになった。音声データを電氣的・電子的に記録できるようになり、再生までの過程に音響処理を介入させ、生音では作ることができない新たな音響を生み出すことができた。しかし、未だに電子音はスピーカーを用いて拡声されることが一般的である。そのことは電子音楽のフレームを固定する要因になっているのではないだろうか。

本作品の試みは楽器の響きをアップデートすることである。これまでの電子音楽で培われてきた電子音響と、ヴァイオリンの響きを融合させ、新たな音響を奏でる。ヴァイオリンには振動スピーカーが取り付けられており、誰かに演奏されることなく音が鳴る。予め録音されたヴァイオリンの音を振動スピーカーを介して鳴らすことにより、その楽器固有の音響へと変化する。そしてそのサンプリングは音響処理で加工され、楽器からは鳴らないはずの電子音響が聞こえてくる。

「ヴァイオリンの音」とは何だろう。この装置を使って出てきた音はヴァイオリンの音と言えるのだろうか。従来の奏法では弦を弓で擦る、指で弾く等が発音のトリガーとなり、胴部が共鳴することで特有の音色を奏でた。特殊奏法においても爪で胴部を叩く、弦を弓竿で叩く、ギター・ピックで弾く等の例があるが、それらもまた胴部が共鳴することによりヴァイオリンの音と変化する。このことから発音の要因となるものがいかなるものであっても、ヴァイオリンの胴部が共鳴することで、その音が形づくられると言えるだろう。振動スピーカーを用いたすべての発音もまた、ヴァイオリンの胴部を共鳴させることにより、ヴァイオリンの音として包括される。

ヴァイオリンが誕生してから400年以上の歴史を経て、現代の音響技術と結びついたこの作品は、電子音楽を新しい領域へと押し広げるものとなるだろう。



大久保 雅基 (Motoki OHKUBO)

1988年宮城県仙台市出身。コンピュータ音楽、電子音響音楽、室内楽、オーディオ・ヴィジュアル、インスタレーション等、多岐に渡る表現手法で、音響技術と現実空間の融合を目指している。洗足学園音楽大学音楽・音響デザインコースを成績優秀者として卒業。情報科学芸術大学院大学(IAMAS)メディア表現研究科修士課程修了。松尾祐孝氏、森威氏、三輪真弘氏に師事。現在は名古屋芸術大学デザイン学部、愛知淑徳大学人間情報学部非常勤講師。仙台にて現代音楽コンサート・シリーズ「絶頂」を主宰している。Contemporary Computer Music Concert 2010にてACSM116賞受賞。

セクシー・プライムズ

東北での大きな地震の影響で、昨年とは違い浮きだった様子もないゴールデンウィークも明けて間もない水曜日。
珍しく仕事が早く終わったこともあり、無意識のまま帰路とは逆の都心に向かうホームに立つ。とりわけ急ぐ理由もないのだが次に来る特急の空席が目に入り、券売機で特急券を購入してロマンスカーに乗り込んだ。
車内は閑散としていて隣の席に座る者もない。
悠然と体を広げ、足を伸ばす。
終点まではたった数十分ほどの乗車ではあるが、疲れもあったのかついウトウトと眠りについてしまった。

感覚としてはほんの一瞬の眠りで夢が現実か朦朧としていたかと思う。
耳元で艶かしい声が聞こえる。
駅員は男性であると思いついていたためか、意外なサウンドによる短い睡眠からの目覚めは多少気分が良いものだ。
ここからどこに向かうかも決めてはいないが、自然と歓楽街のある東口へと足をを進める。
兎角何時に来ても人の多さに翻弄されてしまうが、今日は週の中日で足元も悪くまだ時間も早いのか幾分往來する人は少ないように感じた。
それにしても、まだ夕方早い時間にもかかわらず、普段より増して調子の良い兄さんからの客引きが目立つものだ。
目的がないまま歩いていると、以前通った時は目に入らなかった店の看板に引き寄せられていく。

“Bar セルゲー—今宵あなた様を生と死の審判に誘います—Dies irae”
この時代に到底つけることはないであろう、胡散臭げなキャッチコピーに釣られる客の顔が見てみたいと自ずと扉を開ける。
カウンターにはナチュラル・マスタッシュが印象的なパーテンと見る限り三十路に入ったばかりかと思われる女の客がいるのみ。
離れて座るにも客は他におらず、せっかくなので声をかけ女の隣に座る。
女の名は“エリコ”、数年前に上京してからというものの毎週通っている常連客だ。
関西訛りがあるので聞いたところ関西でも但馬地方の出身で、同じ兵庫県同郷とあってすぐに意気投合することができた。
彼女からの包容的な空気が漂うがためか、六甲山から見る夜景、ハチ北高原でのスキー（彼女にはハチ北はダメらしい）など同郷話、日々の喧騒の愚痴からどうでも良いアホな話まで、何故か色々話が進む。

そんな中、彼女の村にだけにある、習わしやしきたりの不思議な話を聞いた。
一つに、とある年に生まれた者は、男女問わず親族間や村で行われる催事は決められた年の月日で行うこととされ、他の年生まれの人とは別格な扱いをされるそうだ。
例えば誕生日は毎年来るものではなく、限られた年に年齢が一つ進む。
聞くと、彼女の現年齢は5歳でありそれ以上の歳は取らないという。
また、結婚できる相手の生まれ年も限られていて、僕が後1年遅く生まれていたらエリコの相手候補者になれたらしい。
ただ、生まれ年が合っても、特別な“愛の言葉—Los requiebros—”を共に歌いあって互いに感情を共感して同調させる儀式のようなものを成功させることが必要になるという。

その特別な歌は、数あそびのような歌で、100までの中の特別な数字を選び、選ばれた数字の中からさらに特定された2つの組み、3つの組み、4つの組み、5つの組みとグループを作り、その数字に可能な音域内で音程と緩急の調子をつけ、それらを連結することで一つの歌になるという。
また、求愛の儀式以外においては、この歌の旋律とリズムを混合させて編曲し、いろんな楽器で演奏しても良いとなっているそうだ。
説明を聞いただけでは難解で、どんなものなのか歌って聞かせて欲しいとお願いはしたが、特別な歌のため容易に人前で歌うことは出来ないという。
あつという間に時間は過ぎ、終電の時間も近づき、つい明日の仕事の現実が脳裏に過ぎり、また会う約束をしてその日は別れた。

それ以来、時間に余裕もない日々が続く、この日のことはすっかり記憶から失われていた。
ここ数年ゴールデンウィークもなく連日出勤が続いていたが、明けた今日は久しぶりに早く仕事を切り上げることができた。
今日は偶然にも同じ日で、ふと、6年前の出来事を思い出し、早々に店があった通りに足を向ける。
都会というものは入れ替わりが激しい。
すでに、あの日訪れたBarは別のものになってしまった。
そういえば、今度会う時には例の歌のピアノ編曲版と一緒に聴こうと、約束していたのだが。



由雄 正恒 (Masatsune YOSHIO)

神戸出身。作曲家、メディアマスターNo.75。コンピュータによる芸術作品の創作を専門とし、アルゴリズム・コンポジション、音響合成、ライブエレクトロニクス、メディア表現を題材にした創作研究を行っている。電子音響作品は、国内外 (ICMC-国際コンピュータ音楽会議、Contemporary Computer Music Concert, FUJI acousmatic music festival, MUSICACOUSTICA-BEIJIN, Festival FUTURA等) において演奏される。

昭和音楽大学作曲学科、IAMASアートアンドメディア・ラボ科を卒業。三輪真弘に師事。MOTUS 夏期アトリエ・バリ2006にてドゥニ・デュフル氏などからアコースティック音楽作曲法とアコースモニウム演奏法の指導を受ける。日本作曲家協議会、日本音楽即興学会、情報処理学会音楽情報科学研究会会員、先端芸術音楽創作学会運営委員、日本電子音楽協会理事、昭和音楽大学准教授。<<http://masatsu.net>>

演奏者—JSEM 特別コンサート



尾崎 朝子 (Tomoko OZAKI)

小学校より吹奏楽部に入学し、Tenor Saxophoneを始める。洗足学園音楽大学ジャズコース卒業。大学を卒業後、Jazzや音楽をもっと身近に感じてほしいという想いから、jazzバンドMorning Childを結成し、現在は千葉県を中心に関東にてレストランやカフェ、商業施設や学校訪問演奏など様々な場所で演奏をしている。イベント等にも多数出演中。



大井 浩明 (Hiroaki OOI)

ベルン芸術大学 (スイス) ソリスト課程修了。朝日現代音楽賞 (1993)、アリオン賞 (1994)、青山音楽賞 (1995)、村松賞 (1996)、出光賞 (2001)、文化庁芸術祭賞 (2006)、日本文化藝術賞 (2007)、一柳慧コンテンポラリー賞 (2015) 等の他、CD『シナファイ』はル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック'CHOC' グランプリを受賞。作曲家個展シリーズ「Portraits of Composers (POC)」は現在までに41公演を数える。<<http://ooipiano.exblog.jp>>

フロアマップ

ソフトピアジャパンセンタービル



